

令和元年6月29日現在

機関番号：32526

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03768

研究課題名(和文)国際水準に基づく教科書・教員養成課程の分析および性教育プログラム開発に関する研究

研究課題名(英文) Research on the analysis of school textbooks and teacher-training course with regard to sexuality education, and on the development of sexuality education program based on the international standard

研究代表者

池谷 壽夫 (IKEYA, HISAO)

了徳寺大学・健康科学部・教授

研究者番号：90136367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,000,000円

研究成果の概要(和文)：1)教職課程での性教育関連カリキュラム調査と中学校における性教育実態調査から、教職課程における性に関する内容を含む科目がある大学が約4割、しかもその大学の約4割は選択科目であること、また中学校では性教育の担当者として保健体育科教員が9割を占めるなど、性教育が保健体育や学習指導要領の内容に縮減される傾向があることが明らかになった。2)本科研の海外調査を含めた今までの海外の性教育関連教科書の調査の成果として、著書『教科書にみる世界の性教育』(かもがわ出版)を出版した。3)思春期男子が固有に抱える課題を明らかにし、少ない男子性教育の実践や構想を概括して、思春期男子性教育プログラム構想を提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第1に性教育を主として担っている当の中学校保健体育教員の多くが大学の教職課程で性教育に関連する授業を受けずにいることを明らかにしたことである。教職課程での性教育を早急に充実することが望まれる。第2は、性教育に関連する学習指導要領と教科書を国際比較することによって、日本の学校教育における性教育の課題が明らかになったことである。科学と人権にもつじた性教育の充実が望まれる。第3は、性教育の不十分さとインターネットに溢れる誤った性情報のもとで、性のトラブルを多くの男子が抱えているにもかかわらず、これまで検討されることのなかった思春期男子向けの性教育のプログラムを提起したことである。

研究成果の概要(英文)：1)We revealed the following from the researches both on the sexuality education related to curriculum in teacher-training course and on the actual situation of sexuality education in junior high school. Firstly it was only 40% of the Universities with teacher-training course that provided the subjects related to sexuality education, and moreover 60% of those Universities provided non-compulsory subjects. Secondly 90% of the teachers responsible to sexuality education were health and physical education teachers, therefore its content tended to be confined to the content of both health and physical education and national curriculum.2)We published the book "The international comparison of sexuality education viewed from the textbook" as the results of the research on the foreign textbooks concerning sexuality education. 3) Summarizing sexual troubles adolescent boys have and lesson practices related to sexuality education for adolescent boys, we proposed the program concerning it.

研究分野：ジェンダー、セクシュアリティと教育

キーワード：ジェンダー セクシュアリティ 性教育 男子支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本における性教育プログラムを開発する際、重要な指標となるのが、国際的なセクシュアル・ライツと性教育の到達点である。前者のセクシュアル・ライツについては、リプロダクティブ・ヘルス/ライツをその重要な要素として含みつつも、それをこえ出るものであり、自由権にとどまるものではなく、社会権としてとらえられねばならないことが確認されている(池谷 2015)。後者については、この間、SIECUS (2004)、UNESCO (2009;2018)、WHO ROE/BZgA (2010)が相次いで出されている。そこでは具体的な性教育プログラムも提起されているが、そこに共通している原則は、性教育に関する肯定的アプローチ、人権(セクシュアル・ライツ)アプローチ、参加アプローチ、ジェンダーの差異と平等アプローチ、年齢と発達に適切なアプローチ、ダイバーシティ(多様性)アプローチ、である(池谷 2014;2018)。

もう1つ考慮すべきは、今日、とくに先進国では思春期男子(adolescent boys; ティーンエイジャに当たるおよそ12歳~18歳の男子、以下男子と略する)も彼ら固有の性的課題をいくつも抱えていることである。まず、男子問題は、PISAにおける読解リテラシーの遅ればかりではなく、最も親密な関係でのセクシュアリティの領域でも顕在化している。先進国で共通している問題としては、デートDVも含めた性暴力、「男性性」へのとらわれの中で隠蔽されている、性に対するおそれや不安、女子に比して、性に関する知識が貧困であること、「社会のポルノ化」(Schuegraf und Tillmann 2012)のなかでポルノ消費が男子のセクシュアリティ構造に与える問題(Schmidt/Matthisen 2012、中澤 2013)、性や恋愛の身近な相談者として役に立つ同性の大人の不在(BZgA: Jugendsexualität 2015; 池谷他 2017)などが挙げられる。さらに、日本固有の問題として、性に対する無関心や忌避感が女子のみならず男子にも増えている(日本性教育協会編 2013; 池谷他 2017)。

こうした男子をめぐる状況のなかで、性教育においても、女子の支援と同時に男子に対する意識的な支援がようやく自覚され始め(Alldred & Miriam 2007; 村瀬 2014)、イギリスやドイツでは、学校外教育や学校教育において男子援助活動(social work with boys; Jungenarbeit)が進められている(池谷 2009)。しかし、日本では男子を意識した性教育実践はわずかしかない。そうした性教育実践を調査するとともに、男子を含めて、発達段階と性的課題に対応した性教育プログラムを開発することが今求められている。

先に見た国際的な水準に比して、日本の性教育に関する教育内容や教育課程の立ち遅れが明らかであるが、それを正確に把握する必要がある。性教育に関連する教科書の国際比較については、松田良一(2006)もあるが、これはあくまでも、科学教育の視点からの言及にとどまる。本研究代表者も参加した「<性>に関する教育の内容構成・教育課程とジェンダー平等意識・セクシュアリティ形成」(科研基盤B、H25~27年度、研究代表者:橋本紀子)では、フィンランド、フランス、ドイツ、オーストラリア、韓国の教科書が検討され、次の3点が明らかにされつつある。欧州や韓国でも性教育は、主に「生物」「科学」「健康教育」「家庭科」等の教科で取り上げられている、しかもそれらの教科書では、遺伝と生殖、性感染症、避妊のみならず、生命倫理、生殖補助医療等に関わる最新の知識が書かれ、また性的少数者も含む多様な人間存在や性と生殖に関わる事項への責任ある行動の必要性が述べられている、これに比して、日本では性教育関連事項は主に「保健」で扱われるが、性的少数者についての記載は全くなく、生殖補助医療についての記述もかなり少なく、また生物の教科書では人間の性や生殖に関しては「参考資料」としての扱いであり、これらヨーロッパ各国の教科書のように人間の性を全面的に扱う構成とは程遠い状態にある。ただし、この調査ではオランダやイギリスの教科

書が分析されておらず、アジアも韓国のみである。また、性教育の国際的な到達点を踏まえて、「発達に適切なアプローチ」の視点から教科書の国際比較をすること、さらにそうした教科書のもとになる学習指導要領の国際比較研究も必要となるなど、いくつかの課題が残されている。学校における性教育を充実させるために、保健教科書の充実のみならず、それを使いこなせる教員の「性教育コンピテンシー」が不可欠である。この点で多くの性教育研究者は、教員養成での性教育関カリキュラムの充実を指摘する。数見隆生編著（2010）は、性教育をなしうる資質や専門性が育てられないまま教員として現場に送り出されている教員養成の現状を指摘し、さらに、多くの教員が生徒の性の問題をプライベートな個人責任の問題だと認識しているがゆえに、セクシュアリティが教育の問題や課題として意識されづらいことを指摘している。しかし、性教育に関わる教員養成の現状と課題についての十全な調査はほとんどない。松浦賢長他（2002）や児嶋芳郎（2014）があるものの、前者は教育大学だけの調査であり、後者は特別支援教員養成課程の調査に限定されている。教員養成段階での性教育関連カリキュラムについて現状を把握し、性教育コンピテンシーの向上のためにどのような課題と方策があるかを明らかにすることが早急に求められている。

2．研究の目的

日本の性教育は 2002 年に始まる性教育バッシング以降、性教育実践やセクシュアリティに関する教科書記述も科学的な側面で後退し、国際的動向との乖離が顕著になっている。本研究は、性教育の国際的な到達点を踏まえた上で、国内外の男子を含む性教育プログラムの収集・分析と教科書の比較、日本の教員養成課程におけるセクシュアリティと性教育関連カリキュラムの実態調査を通じて、日本に適した性教育プログラムの開発を目的にする。

- 1) 男子を含む性教育プログラム（学校における教科横断的年間計画）の開発
- 2) 海外諸国と日本の性教育関連教科書の比較検討
- 3) 日本の教員養成課程における性教育関連カリキュラムの実態調査

3．研究の方法

3 年間のプロジェクトとして、以下の 3 つの研究目的に合わせて、3 つの作業課題を設定し、それぞれ責任者をもうけて、研究を進めていくことにした。

（1）作業課題 1 - 思春期男子性教育プログラムの開発

1) 国際レベルでのセクシュアリティと性教育関連文書における基本原則を確認し、そこで提案されている性教育プログラムの共通点を浮き彫りにする。それとの対比で日本の性教育関連の教科書（とくに保健）の問題点と課題を明らかにしていく。

2) これまでなされた青少年の性意識調査と池谷他（2017）で行った「青少年の恋愛と性に関する国際比較調査アンケート」をもとに、思春期男子が固有に抱える性的な課題を析出する。

3) 必要に応じて日本の性教育の実施状況を調査する。

（2）作業課題 2 - 海外諸国と日本の性教育関連教科書等の比較検討

1) イギリスと最も性教育が充実しているといわれるオランダ、および東南アジアのタイを中心に教科書等のデータを収集・充実させる。

2) 日本の現行の教科書（保健・家庭科・理科[生物]・倫理・現代社会・[平成 30 年度以降の]道徳など）を分析する。

3) 海外と日本の教科書等の内容を比較検討する。

以上の作業から日本の性教育に関わる教科書および教育課程における課題を明確にする。

(3) 作業課題3 - 日本の教員養成課程における性教育関連カリキュラムの実態調査と課題の析出

1) 国立教育学部系大学における性教育関連カリキュラムを収集し分析する(できる範囲で私立校も対象とする)。

2) 性教育関連カリキュラムがどのように運用されているか、全国的な質問紙調査(実態調査)を実施する。

3) 質問紙調査の結果を踏まえて10校くらいの教職担当教員にヒアリング調査を行う。

以上から、教員養成課程における性教育関連カリキュラムの実態と課題を明確にする。

この計画に沿って、**作業課題1**では、男子問題を研究している池谷壽夫(了徳寺大学)が統括し、そのもとに 国際的な性教育等に関する文書の到達点の確認、 思春期男子固有の性的課題の析出、 思春期男子性教育プログラムの開発、の3つのサブ作業グループを設け、並行して作業を進めることにした。

作業課題2では、海外教科書調査を系統的に行ってきた池谷壽夫・橋本紀子(女子栄養大学)が統括し、同様に ヨーロッパやアジア圏の性教育関連教科書等の収集、 日本の現行の教科書の分析、 海外と日本の教科書等の内容のつきあわせ、の3つのサブ作業グループで、並行して研究を進めることにした。

作業課題3では、教育学部系所属の関口久志(京都教育大学)と久保田美穂(女子栄養大学)が統括し、 各大学の性教育関連カリキュラムの収集、 教育学部系大学への質問紙調査、 教職担当教員へのヒアリング調査、の3つの作業を並行して進めることにした。

4. 研究成果

(1) まず**作業課題3「日本の教員養成課程における性教育関連カリキュラムの実態調査と課題の析出」**においては、教職課程における性に関する内容を含む科目をもたない教員養成大学が約6割あること、しかも当該科目があるとする大学でも必修・専攻必修が約4割しかないことが明らかになった。つまり、このことは、かなりの教職学生が性に関する授業を受けず、学校現場に送り出されていることを意味している。第2部でのアンケート調査で明らかのように、保健体育科教員が中学校での性教育の担い手の9割を占めている現状からすれば、ほとんど性教育を受けたこともないままに多くの教員が性教育の授業を行っていることになる。

(2) 本研究を進める中で、今日の日本の性教育の実態の実態を把握する必要がうまれた。そこで**2007**年にわれわれのメンバーが実施した全国調査と同じアンケート項目で、実施することにした。この「**中学校における性教育に関する調査**」からは次のことが明らかになった。

2007年調査時に比べて、性教育の時間数がわずかに減った。

性教育の担い手として養護教諭などが減り、保健体育科教員が増えて9割を占めることで、中学校における性教育が、保健体育科の教科書や学習指導要領に示される内容にますます縮減される傾向がある。

その一方で外部講師の利用が増えるとともに、保護者との連携の機会が減っている。その実態を踏まえて、思春期の中学生の性教育の課題として、セクシュアリティを基本人権からとらえ直すことの必要性、 学習指導要領における「受精にいたる過程を取り扱わない」(小5)「妊娠の経過は取り扱わない」(中1)といういわゆる「はどめ規定」が今日の子どもの実態にそぐわないこと、エビデンスに基づいた性教育の実施の必要性を提起した。

(3) **作業課題2「海外諸国と日本の性教育関連教科書等の比較検討」**では、イギリス、オランダ、タイの性教育調査にもとづいて、各国の性教育と性教育関連教科書を分析した。

イギリスでは、これまでナショナルカリキュラムとしては、**11～14歳**の「サイエンス」のなかで性に関連する生物学的な事項が必修として扱われていた。しかし、**2020年**から性教育がナショナルカリキュラムに取り入れられ、すべての学校において義務づけられるようになった。この背景には、セクスティングやネットいじめなどの人間関係と性の問題に対処するためにも、人間関係の構築を基礎とした性教育が求められたことがある。

タイでは、**2008年**の「基礎教育コアカリキュラム」において、人間の生活と**HIV**予防という観点から、保健体育に焦点化して、次の**6領域**を性教育の構成要素としてあげている。人間の性的発達、性的健康、性行動、関係性、個人の価値、態度、スキル、社会、文化、人権。これには**UNESCO**の協力と影響がある。そして、**2016年**の「思春期妊娠問題の予防と解決法」で、すべての学校に性教育が義務付けられ、保健体育で1学年約**10時間**性教育が行われている。ただし、その教科書での性教育の内容は道徳的な色彩が強く、十分なものとは言えない。この点で**Path2 Health Foundation**などの民間団体の役割がきわめて重要となっている。

オランダでは性教育が**1993年**に義務化されている。その性教育の特徴は、ルトガーズその他の民間団体や保健局と協力して、学校内外で性教育を進めていること、学校では今日「春のムズムズ・ウィーク」(初等教育)と「愛情バンザイ」(中等教育)による授業(二重プログラム)として具体化されていることである。こうした体系的な取り組みのなかで、青少年の性的行動が抑制されてきている。

これらの国々の調査から、性教育が重要な課題としてカリキュラムに正當に位置づけられ、民間団体と協力して性教育が進められていることが明らかになった。

また、この調査の成果を含めて、われわれがこれまで行ってきた海外性教育調査の成果を、橋本紀子・池谷壽夫・田代美江子共編著『教科書にみる世界の性教育』(かもがわ出版、**2018年**)として出版した。

(4) **作業課題1「思春期男子性教育プログラムの開発」**では、日本における思春期男子が固有に抱える課題を明らかにするとともに、男子性教育の実践を行っている教員にインタビュー調査を実施するとともに、これまでの国内外の性教育実践・構想を概括して、思春期男子性教育プログラム構想案を提起した。

最終的に、以上の成果として、『国際水準に基づく教科書・教員養成課程の分析および性教育プログラム開発に関する研究 研究成果報告書』として出すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計**13**件)

Noriko Hashimoto et al., „School education and development of gender perspectives and sexuality in Japan. *Sex Education*, 13 Feb 2017.

橋本紀子、良香織、森岡真梨、田中和江、茂木輝順、田代美江子、井上恵美子、池谷壽夫、関口久志、丸井淑美、澤村文香「日本の学校教育とジェンダー・セクシュアリティの形成」**JASE『現代性教育研究ジャーナル』No.76、1-9 (2017年7月)**

茂木輝順「『性教育バッシング』をこえて - エビデンスに基づく性教育の構築を」『人間と教育』(旬報社)**100号、pp.104 - 111 (2018年12月)**

茂木輝順「今年度(2016)の高校1年生(2000年度生まれ)が手にした教科書から性教育の内容を概観する」『性の健康』(性の健康医学財団)第**15巻3号、2016**

池谷壽夫「ジェンダー平等教育とセクシュアリティ教育の課題」『民主教育研究所年報**2015**』

- (民主教育研究所)第16号、88-97.(2016年7月)
- 池谷壽夫「脆弱性」からセクシュアリティと道徳を考える」、季刊『セクシュアリティ』第77号、62-70、2016.
- 橋本紀子「世界から見た日本の性教育」、『季論21』43号、pp.130-142(2019年1月)
- 橋本紀子「日本国憲法下でのジェンダー平等教育の進展と現在の課題」、『女性白書2018』ほるぷ出版、pp.41-46(2018年8月)
- 橋本紀子「LGBT教育の内容とは何か、それをどこで扱うか」、『体育科教育』8月号 pp.20-23 大修館書店(2016年8月)
- 橋本紀子「セクシュアリティをめぐる国際的動向と海外の教育課程における性教育の取り上げ方」、『保健の科学』58巻6号 pp.364-368、杏林書院(2016年6月)
- 加野 泉「アメリカ・ヘッドスタートが描く新しい父親像」、公益財団法人東海ジェンダー研究所『ジェンダー研究』第21号(2019.3)
- 関口久志「性産業と大学生」、『季刊セクシュアリティ』(エイデル研究所)76号、pp.106-109、2018
- 関口久志「ネット恋愛ゲームから暴力被害」、『季刊セクシュアリティ』(エイデル研究所)76号 pp.142-145、2016
- 〔学会発表〕(計3件)
- 茂木輝順、久保田美穂、橋本紀子、池谷壽夫、関口久志、森岡真梨、田中和江、加野泉「日本の中・大規模中学校における性教育の実態調査 2017年調査と2007年調査との比較」、第37回日本思春期学会総会・学術集会シンポジウム、2018年8月19日
- 茂木輝順「青少年の恋愛と性に関する調査研究報告」教育研究全国集会2016(静岡県立大学、2016.8.20)
- 加野泉「アメリカ・ヘッドスタートの家族支援」社会文化学会中部支部研究会、2016.1.23
- 〔図書〕(計5件)
- 橋本紀子・池谷壽夫・田代美江子共編著『教科書にみる世界の性教育』かもがわ出版、2018 茂木輝順、森岡真梨執筆
- 浅井春夫・良香織・鶴田敦子編著、『性教育はどうして必要なんだろう? 包括的性教育をすすめるための50のQ&A』大月書店、2018 池谷壽夫、関口久志、橋本紀子執筆、
- 橋本紀子・田代美江子・関口久志共著編『ハタチまでに知っておきたい性のこと』(2版)大月書店、2017
- 池谷壽夫・市川季夫・加野泉共編著『男性問題から見る現代日本社会』はるか書房、2016
- 関口久志『新版 性の“性”幸せガイド』エイデル研究所、2017

6. 研究組織

(1)研究分担者

- 橋本紀子 NORIKO HASHIMOTO 女子栄養大学栄養学部・名誉教授 研究者番号:20138530
- 久保田美穂 MIHO KUBOTA 女子栄養大学栄養学部・講師 研究者番号:00759029
- 関口久志 HISASHI SEKIGUCHI 京都教育大学教育創生リージョナルセンター機構・教授 研究者番号:70598755

(2)研究協力者

- 加野泉(名古屋工業大学ダイバーシティ推進センター) IZUMI KANO
- 田中和江(女子栄養大学客員研究員) KAZUE TANAKA
- 茂木輝順(女子栄養大学非常勤講師) TERUNORI MOTEGI
- 森岡真梨(女子栄養大学客員研究員) MARI MORIOKA